

ジョナサン ビル 英国出身の元カトリック信者（上）

5.0

明:トラウマだらけの 去を持つ、若い英国人男性による改宗。

目:[事新改宗者ムスリムの逸 男性](#)

より: ジョナサン ビル

日 5 May 2015

集日 25 May 2015



1987年の5月2日、私は英国に生まれました。 は私はジョナサン ビルと名付けました。父の名はジョン メ ソンといますが、公的 助をより多く受け取ることができるよう、私には母方の名字が与えられました。

はいずれもヘロイン中毒者でした。私は父が母を殴っているのを何度も目 しましたし、彼は には自宅に他の女性たちを れてきたものでした。注射 の山をかき分けたり、奇妙な人々が自宅の公 住宅に出入りするの私にとっての日常でした。

私の思春期は容易なものではありませんでした。公的 が介入し、私は一 的に 童 施 に けられました。

なぜかは分かりませんが、私は神の概念というものを知っていました。母方は大家族だったため、死の概念には何度も遭遇していました。私の国は「文明化」しているものの、祖父は第二次世界大の苦な期に生きていました。

祖父の友人たちは皆死を遂げ、彼自身も二度に渡って を受けており、重い争 症にかかっていました。彼は落下兵だったため、ナチスの支配地域に何度も降下していました。

、彼は祖母と7人の子をもうけました。彼らは信仰深かったものの、争のあとには何も残されておらず、母によると祖父は子供たちへ日常的に体 を加えていたそうです。

いずれにせよ、何らかの要因が家族の中で精神病の大きな 染を引き起こしました。母は妄想型 合失 症と 断され、私は子供ながら も自分たちに を企ててはいないということを得しようとしていました。彼女は狂 じみたことを り返し、何度も地元 に ったほどでした。そのため、私は学校でいじめに会いました。

祖父は私が4 のときに他界しました。そのとき、「神」について最初に耳にしました。えている限り、祖父は私に してはいつもとても しかったため、私が彼について いていたことが真 であるかどうかは分かりません。

それゆえ、私は彼が天国にいるのだと思うことにし、それ以来、常に神は私と共にあるのだと感じていました。 の状 が困 な 、私は一 的に 童 施 に けられましたが、祈るようになったのはそのときからです。どうやるのかを かに教えられた ではありませんが、神はいつも自分のことを いていくれているのだと 信しており、自己流で祈っていました。

私がまだ若いとき、 兄弟は 痛 の大量 取によって自 をしましたが、そのときに初めて葬 で を流しました。叔父も原因不明の死に至っていますが、重い精神病を患っており、酷な人生を んでいたことは知っています。彼が来世では良き 所にいることを っています。

これらの出来事にも わらず、神への信仰は私の魂の奥底にしっかりと根ざしていました。7 のとき、父が 作を起こしアパ トを 茶苦茶にしたとき、福祉事 は私の 境があまりにも不安定であるとみなし、私の身柄を祖母の家に移しました。

その 、母は妹のサリ を みました。当 、私はまだ 家を定期的に していたため、妹と会うのが しみで仕方ありませんでした。多くの兄弟は喧 ばかりしますが、私は妹をとてもしており、生まれたばかりの彼女は知らなかったでしょうが、彼女とは一心同体であると感じていました。不幸にも、福祉事 は 境を危 とみなし、彼女を 童 施 に送ってしまいました。

その 、祖母が私を引き取るよう要 され、私は彼女の家に住むことになったのですが、妹が1 になったとき、福祉事 は私たちが彼女と わらないことが最善だと判断し、彼女はい 所の匿名の里 の元へ引き取られてしまい、それ以来未だに彼女とは会っていません。

当 の私はとても悲しみ、いつも彼女のことを考えていました。いずれは してくれないかと期待しています。もし一 に成 できれば仲の良い兄妹だったに いないとは思いますが、私は 保 な兄になったかもしれませぬ。在、彼女はまだ未成年であるため、（自らを取ることでできるようになる）18 になるまでは数年の がありますが、もしも再会が叶えば失われた を取り したいと思っています。

11 のとき、私は全寮制の学校に送られました。しい家庭の出身だったため少しいじめられましたが、全体的には良い をすることができました。しかし私は で、物やアルコールに手を出すようになり、4度停学になりました。

私が退学にならなかったのは幸 でした。 で5つのCと3つのBを取ったからでしょう。授には殆ど出ていなかったのにそうした成 が取れたことにもが不思議 りましたが、将来的にそれらの成 は重要なものになりました。

を多く抱えてはいたものの、神への信仰は薄れませんでした。12 のときには口 マ カトリック教徒になることに め、学校 はレッスンを んでくれました。それらのレッスンに

は殆ど注意を わなかつたものの、神の概念には魅せられており、教会に行くことも大好きでした。

学校を退学すると、 に拍 がかかりました。マリファナを吸い始めたときはいわゆるハードドラッグだけはやらないと め んでいましたが、やがてコカイン、エクスタシ 、スピードなどにも手を出すようになり、それが人生そのものになってしまいました。

私は中毒になっており、 しさのあまりそうした人生に生き甲斐を 出していました。また 繁に 酒しており、警察ともたびたび を起こしました。私は友人と 中の を破 したり、麻 を ったりとやりたい放 でした。英国の刑事司法制度は 大で、 というものは存在しないも同然です。

最 的に、ある人物を刃物で突き刺すと 迫した 、私は刑 所に入れられました。それは私の人生を えました。それは生ぬるい休暇のキャンプのようなものに ぎませんでした。私は犯罪者のままではいたくありませんでした。そうした 境からは出なくてはなりませんでした。

1日3食のおいしい食事、テレビのある部屋、 日使えるジム施 、大学への 学の道、 日曜日の教会、そして何よりも私に多大なストレスを与えていた家族から ざかれた私は、それまでの人生で最も良い生活を送っていました。

ただ、私は普通の家族というものに憧れていました。家族が一 に い物をしたり、 かの家でお茶会をしたりする光景を目にするのは喜ばしいものでしたが、心の底ではそれに嫉 していました。

私にとっての主たる はアルコ ルでした。私はアル中ではなかつたものの、 んだときは必ずといって良い程 を起こしました。目を ますと二日 いの状 が警察の留置所かのどちらかでしたし、身体中が喧 による や痣だらけのときもありました。

刑 所の中ではそれらのこと（や麻 の 取）から れ、健康状 も良好でした。私はその状 を出所 も 持したいと いました。

残念ながら、出所にも凶害事件における法廷での会に出なければなりませんでした。自分がやってもいないことに4年の役が科される可能性がありました。

私の「友人」のトレナには、血痕と皮胞が残されており、彼は自らの有罪を認めました。私は法廷で彼がやったのかどうか聞かれました。それ以前、彼はすでに罪状を認めていたので、是したとしてもに害はないと思っていました。弁士によると否した場合、友人は罪状を既に認めていたため彼を救うことにはならないと助言しました。彼は「なぜ4年も服役しようと思うのか」と言いました。私は友人にを掛け、そのことについて明し、彼の了承を得ました。

私はこれらの出来事を通して私と共にいてくれた、メリッサという美しい女性と付き合い合っていました。法廷での裁判の、「友人」の家族は、彼が刑所行きになったのは私の任であるとして噂を流し、私はえず喧や中にきまれるようになりました。

私の彼女はどこか他の所で新しいスタートを切ろうと言ったため、私もそうすることにして引っ越しのを始めました。しかし私たちの家は既にみが生じており、彼女は私と付き合いきれなくなっため、ほとんど全てのしがらみを断ち切ってその土地を去ることにしました。

私には、直ちに断交すべき友人たちがいました。彼らは相変わらず同じことを続けていましたが、私は人生をやり直したいと思っていました。

この事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/jp/articles/2305>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。